

続
とちぎの
サムライ
vol.34

全国津々浦々
お城めぐりの旅

加藤清正の城

ここ数年、城址歩きをしていると、さまざまな城と歴史に関わることになります。毎回のことですが、自分勝手に書いておりますので、史実と異なる部分があるところはご容赦願います。

(一社)宇都宮建設業協会 木澤 喜人

今回は、「勇猛果敢な戦国武将で築城の名手」と言われた、加藤清正がかかわった城について探ってみたいと思います。加藤清正と言えば「攻め込ませず籠城に強くて堅固な熊本城」を築城した武将として誰もが思い浮かべるはず。熊本では現代でも、清正公さん(せいしよこさん)と呼ばれて親しまれているようです。熊本城を築城するにあたり、朝鮮出兵と呼ばれる「文禄の役・慶長の役」で海を越えて戦った時、朝鮮の城は日本の城とは構造が異なり、石垣の技術や防御の仕組みに相違点があり清正にとって大いに勉強になったようです。二度目の朝鮮出兵(慶長の役)で、清正は蔚山(ウルサン)の西生浦倭城(ソセンポウェソン)に陣を構えました。

西生浦倭城

新山広域市文化財第8号
新山広域市新州郡西生浦西生 711一市

西生浦倭城は、文禄・慶長の役の起きた年の翌年である1593年5月から、日本の陸軍加藤清正が指揮し、石で積み上げた16世紀末の日本式の平山城である。旧江口川口の小さな洲を抱え、標高133m高地の山頂に内城を築き、東側の傾斜面を利用し、複雑な構造の2段、3段の副郭を築き、その下に、山の下まで徐々に長く広がる外郭を配置した。城壁の外には2重、3重に堀を置いた。城郭の全体面積は堀を含め、151,334㎡に達し、堀を除く城郭の長さ約2.5km、平面上の面積約100haに達し、南北に約230mに達し、南海岸各地に散在する倭城の5、最も巨大である。現在山頂には、高さ約5mの天守台が残り、白の内外郭には多数の井戸の跡地が確認されている。城壁は、外郭の場合、外郭のみで積み上げる内郭式であり、内城は内郭と外郭を全て石で積み上げる夾心式で重なり、傾斜は地面から60°以内である。1594年から西軍大勢が、4回に渡り、ここに数回平和交渉をし、多くの外交的成果を挙げている。1598年、朝鮮の海軍の戦いで城を取り返し、1年後、外郭と争って戦死した53名の忠臣を祀るため、百善堂を建てたものの、現在は破壊され跡地のみが残っている。西生浦倭城は、文禄・慶長の役直後から1895年までの約300年間の朝鮮水軍の同僚軍制使として使われていた。

◀日本語で書かれた現地の案内板



◀西生浦倭城 大手門跡



◀天守台に上がる石垣が崩れている

清正は要請があった蔚山城の普請を監督していた時、未完成のうちに明と朝鮮の連合軍6万の大軍勢に城を囲まれ、籠城せざるを得なくなってしまいました。兵たちは奮戦し続けたものの、ありとあらゆるものを食べ尽くし、井戸はなく水は雨水頼りで餓死者が続出しました。玉砕寸前までになった時、やっと日本軍が救援に駆けつけてきて、九死に一生を得たのでした。清正はこの時の地獄を見る思いを忘れることはありませんでした。

関ヶ原合戦では東軍についた清正は、徳川家康から小西行長の丘陵地を加増され熊本54万石の大名となりました。1601(慶長6)年に熊本城普請に着手し、6年の歳月を費やして完成しました。敵が攻め込んできた時に備え、櫓49・櫓門18・城門29を造りましたが、そのうち13棟が現存しています。また、熊本城が堅牢である理由の一つに複雑に折れ曲がる通路が挙げられます。石垣を大胆に屈曲させ、徹底的に側面から攻撃を加えられるからです。さらに、朝鮮でつらい思いをした籠城に備え、城内になんと120を超える井戸を掘り、城に立て籠もっても水が確保されるようにしました。そして兵糧攻めに備え、土壁にはかんぴょうを塗り込め、畳には芋茎(ずいき)を編み込みました。籠城で食料が尽きた際のためと考えられています。また、城内には銀杏の木が多く植えられ「銀杏城」という別名の由来になっています。いずれも、籠城時の非常食にと考えて用意されたものです。加えて、熊本城には「昭君之間」という部屋があります。豊臣秀吉の忠臣だった清正は、秀吉の遺児である秀頼に危機が迫ったとき、この部屋にかくまうつもりだったといわれています。



◀熊本城 大天守・小天守



◀行幸橋のたもとにある清正公像



◀尾山8合目の清正公像 H1182M



◀一番好きなアングルです。手前に宇土櫓、後ろに大天守・小天守



折り曲げられた石垣



上の清正公像の所から、熊本城が見えます

熊本城は、1877(明治10)年に西南戦争開戦直前の火災により大小天守ともに焼失しましたが、1960(昭和35)年、鉄筋鉄骨コンクリート造りで再建されました。しかし、2016年に発生した熊本地震で天守閣や櫓、石垣などが大きな被害を受けました。完全修復(復旧完了)は2052年度の予定だそうです。



崩落・倒壊した西大手櫓門あたり



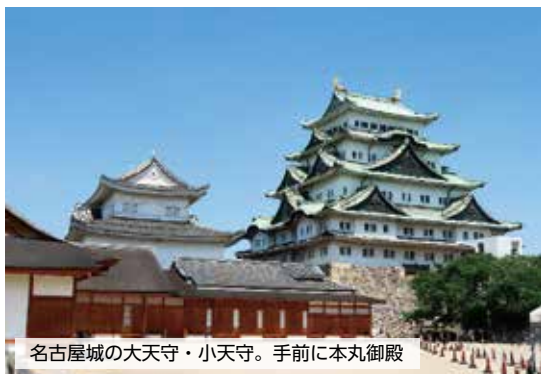
一本足の飯田丸五階櫓



宙に浮いた小天守

秀吉の下で数多くの城を造り、秀吉の没後は家康の下で江戸城、名古屋城などの建設に携わるなど、その腕を發揮しました。しかし、築城の名人として清正の名を広く知らしめたのは、なんといっても熊本城だと思います。次に名古屋城に話題を変えます。

家康は、関ヶ原の合戦に勝利すると、大阪城の豊臣秀頼や、豊臣恩顧の大名を牽制するために、次々と城を新築・大改修して大阪城を取り囲む包囲網を構築しました。東海道上に立ちのぼったのが名古屋城でした。家康は全国の諸大名が工事を請け負う「天下普請」を命じ、最高の城を築きました。名古屋城は城郭として初めて国宝に指定されましたが、多くの建物が太平洋戦争の戦災で失われました。その後、1957(昭和32)年に再建工事に着手し、鉄骨鉄筋コンクリート造の天守閣を復元し、現在は本丸御殿も再建されました。



名古屋城の大天守・小天守。手前に本丸御殿



清正石



清正公・石曳きの像

本丸東二之門を入った正面には、大きさ約8畳敷、重さ推定10トンとされる巨石があります。この石を清正が運んだという伝承があり「清正石」と呼ばれていますが、この部分の石垣の施工大名は黒田長政だったのでは??



天守台の石垣を仕上げたのは加藤清正



▲石垣の東北隅北面に「加藤肥後守小代下総」と、しっかり刻印が残されています



西の丸から見る、西南隅櫓と天守

ほかにも紹介したい城がたくさんありますが、紙面の都合上また機会があればということにして…。清正が生存している頃は築城だけでなく領地の統治などにも手腕を發揮しました。亡くなる直前まで豊臣家の行く末を案じていた義に厚い武将でした。徳川幕府による豊臣恩顧の大名の改易の中で、1632(寛永9)年に清正の嫡男忠広が改易され、熊本54万石から出羽庄内酒井家に預けとなり、1万石で丸岡城に居館を構えました。その際に忠広は清正の遺骨をひそかに運び出し、居館奥庭の太夫石のもとに保管し丸岡大火の後、天澤寺墓地の五輪塔の元に安置したのです。



丸岡城址



清正の遺骨を隠した太夫石



遺骨を安置した清正閣

秀吉の忠臣として活躍し、秀吉の没後は家康に仕えた清正でしたが、時代の変化とともに奈落の底に突き落とされるような何とも言えなく儚い成り行きでした。《狡兎死して走狗烹らる》の例えのごとし。